

Luxurious 38 Years of Enthusiastic and Creative  
International Education at Beppu University  
『シラシンケン』&『ゼイタク』な38年  
—— 独創的な国際教育の開拓と実践 ——

UEDA KENJI  
上 田 見 二

この度、定年退職することになりました。

国語で「光陰矢の如し」、英語で“Time flies.”と言い、どちらも一直線の速いイメージであるが、私の別府大学でのこの38年は、個人的には、矢と言うよりも、むしろ「ブーメラン」のような感じがしてならない。「円」、それも「楕円」をぐるっと廻って、再び自分に回帰して来た-----このように思えてならないのです。「輪」を「廻」る表現すれば、字面のうえでたまたまではあっても、深遠なる仏教語の「輪廻」と重なることになるので、凡夫としてはとても恐れ多いことであるが、これが退任直前の正直な心境であります。

拙稿のタイトルを日英語混淆で書いたが、これには実用的な意味がある。本体が和文だからタイトルも日本語でというのが、従来のスタイルであるが、これでは日本語の読めない英米の友人知人に「存在」すら知られずに終る。ところが、タイトルに英語が含まれていれば、外国のパソコンの検索エンジンでも検索されて、少なくとも「存在」が知られる。中には「翻訳ソフト」を使って英語訳（まだまだ低レベルではあるが）で読んでくれる“読者”が現実に現れる時代になったのである。是こそが、国語で「革新」、英語で“innovation”であろう。

しかし、本稿に限って言えば、一種の“深慮”（仕掛け）が存在している。つまり、英語のタイトルを「検索」することで「存在」自体を発見して頂くのは勿論であるが、それに止まらず、用いられた英単語にある種の「コード」（暗号）を組み入れている。大袈裟な物言いには走ってしまったが、端的に言えば、解る人には解るように用語を念入りかつ意図的に使っているのである。以下、“種明かし”的に論を進めることにする。

先ず“luxurious”であるが、これは下の「ゼイタク」に呼応する。日本人では、文学部長時代の工藤先生あたりから言われた言葉である。私が別に意識してはいない事（事物よりはライフスタイル）に対して、「上田先生はゼイタクですよ」と、

よくコメントされた。その都度、傷つきやすい私を救ってくれたのは、いつもの安東先生の逆コメントであった。曰く、「それを要らん世話というのだ！」工藤先生や同じく文学部長だった後藤先生、更には後に学長というポストにいた中村、黒川両氏（特に後者）には、今から想うと、「イジメ」の範疇に入る事をしてしまったのかも知れない。もしそうであれば、ここで深謝したい。英語の方の“luxurious”はブレナン先生（Prof. Martin Brennan）が最もよく発した。しかし、こちらは決して「非難」ではなく、はじめから「賞賛」の意味合いであった。そして、下手な外交官などより余ほど外交的であった先生は、私が一番喜ぶ表現を知っていた。曰く（勿論英語で）、『上田先生、何が贅沢といって、別府大学とウインチェスター大学の両方向の交換留学ほど“luxurious”なものはありません。日本にも英国にも他にはありませんよ。世界に誇れますよ！』正に“殺し文句”であった。この褒め言葉に煽てられて、ますます意気に感じて「シラシンケン」〈注：大分弁の横網格で、「一所懸命」の意味〉に頑張った上田であった。

「シラシンケン」という大分弁を、勿論褒める目的で、一番使ってくれたのは西村駿一先生であったのは言うまでもない。理事長として、また一時期は大学学長として。西村理事長の下、「ハワイ大学サマーセッション」に始まり、その“お返し”としての「BISS」すなわち“Beppu International Summer Seminar”が立ち上がったのは、わが生涯最高の喜びであった。私は決して忘れない。我が学園が誇る「日本一のオペレーター（電話交換手）」の高司さん〈注：先生方、特に他の大学から転任してきた教授方（故黒田健二郎先生など）が実際こう呼んでいた〉が、わざわざ2台の電話機をプロフェッショナルに設定して、「通訳電話」なるものを臨時に用意してくれた。これが功を奏して、作戦が成功したのであった。西村理事長の要請に快諾した、ハワイ大学側のメルビン・サカグチ学長（リーワード校）が、電話で通訳していた私に、言葉を選ぶようにちょっと上品な英語を使ったことも。“reciprocate”（「返礼する」に相当する語）という英語であった。上品好みの西村先生が直接英語を解せないのは残念であった。

大分の標準語である、この「シラシンケン」に相当する英語は何であったのだろうか？ 大分方言に相当する方言などというものが、英米にあらうはずがないのだから、これは元々愚問以外のなにものでもないが、私の真意は別のところにある。つまり、ブレナン先生以外にも、ハワイで、カリフォルニアで、テキサスで、イギリスで、私と一緒に汗を流してくれた外国人の先生方は沢山いた。彼らは、一体何という英語を使っていたのだろうか。ハワイ大学の最大の恩人である

コナー先生（John Conner）や、他にハワイでお世話になった数え切れない人たちは、大学の最初の海外交流であったこともあり特に印象が強い。

“Go for broke.”という英語はハワイの英語として有名である。第二次世界大戦で米国陸軍史上もっとも多くの勲章を授与された、日系人部隊（442大隊等）が、地獄の欧州戦線で使ったことで有名になった。私はこれが現地ハワイで日常的に使われているものと、当初は誤解していた。実は、このハワイ英語は元もと賭博をする連中の俗語であり、暴力ややくざ的なものを極端に嫌う真面目な日系移民たちに馴染む筈がないのは容易に理解できることである。現地で、ハワイの日系人を知ってから初めて納得できたことのひとつであった。

コナー先生には特別な英語表現があった。“Go for Broke.”の勇敢な日系兵士に負けないかもしれない様な迫力で、“PEACE CORPS SPIRIT！”と叫ぶ瞬間を何度も見たことがある。大学卒業後にアフリカで参加した、ジョン F. ケネディ大統領創設の「平和部隊」の英語名が、その3つの英単語であった。あたかも自分を奮い立たせるかの様に気合を入れて、（日本語に直せば）「平和部隊精神！」と叫んでいたことになる。今でも忘れないのは、初めてのハワイで、西村理事長御一行とマツダ学長（当時）の会見のアボを、相当に無理をして取りに行った時のことである。“Let's go, Ken!”と大きな声で言うなり、大股でサッサ、サッサと前進して行った。何度も、半ば呪文のように叫びながら。「ピース・コー・スピリット！」……。その結果？ 普通は無理と言われていたアボが、例外的に取れたのであった。その後四半世紀にわたって、コナー先生は別府大学のために尽力してくれたのである。私自身、実に7回の引率と式典・会議等で計10回も現地でお世話になった。（本当は、本学の「100周年記念式典」に招待すべきであったと、私は個人的に今でも思っている。井戸を最初に掘った人を忘れる家は栄えないのである。）

38年間の思い出は尽きないが、ハワイ大学との教育交流の成功とLL教室の充実（特に、設立後数年間は見学者の絶えなかった、第2世代LLの豪華な設備）とのコンビネーションが、全てを良い方向へと推し進めるといふ、言わば「良循環」を形成し、最終的には前述したような天下に誇れる「英国1年間留学」へと発展していったという流れは、昭和49年4月に赴任したときには、まったく想定できなかった。

38年前の春、最初の授業で、私は何種類かの驚きを同時に体験してしまった。先ず何よりも、学生の数の少なさに驚いた。次に、男子学生と女子学生の比率に

驚いた。文学部は女子学生が多いものだという先入観を持っていたが、教室に入って目に写ったのは男子の多さだった。別に女子の方が多いことを期待していたわけではなかったが、あまりに予期していたのと違っていた。更に、出席を取る段階になって、もうひとつの意外な事実を知ることになる。何と、違った学年の学生が出席していたのであった。(後に、これはこれで必要性和妥当性があることに気がつき肯定するようになったが。)しかしながら、別の授業で以上3点とは次元の違う驚きを体験することになる。2年生だけの授業があった。僅かに4名しかいなかった。そこで初めて知った。第2学年は全部で4名であるということ。ところが、このような状態であっても、「英文学科がなくなることだけはないから、心配しないで欲しい」と、創設者で学長の佐藤義詮先生は直接私に明言されたのである。このことを、この機会に書き残すことは正に「値千金」の価値があると信じる次第である。学長がつぶすと言わない限り学科がつぶれることはない。これが私立大学である。一言でいえば、このようになる。全ては自己責任であり、文字どおり「独立自尊」そのものである。このような時代があったのである。それも、大昔ではない。英語で言えば、“Not many years ago”となる。

日英語混淆のタイトルに話をもどす。

“International Education”即ち「国際教育」については、申すまでもない。今や、使い古された言葉である。問題は、言葉は使い古されたが、はたして言葉の意味するところは如何程に実践されたのか、この一点に尽きると言えよう。

再び「シラシンケン」に戻るが、この言葉に相当する英語は本タイトルではEnthusiasticとCreativeの2語になる。前者は「熱心」よりは「熱狂的」に近い語であり、後者は「独創的」である。日本語の1語が英語では2語になるのは、「意味」の問題というより別の問題である。例えば、日本人は年がら年中、人を評して「頭がいい」と言うけれども、「どのように」その人物の頭がいいのかについては、あえて言わないのが普通である。計算が速くても、記憶力がよくても、想像性に秀でていても、発明発見の才能があっても、問題解決能力に優れていても、全ては「頭がいい」のである。勿論、必要なならば、より分析的に言うことはできるけれども、普段は言わない。一方、英語では、「頭がいい」に相当する言葉は厳密に言えない。いちいち「どのように、頭がいい」のか、分析的に言い表すのが普通である。

最後に、もうひとつの重大な問題がある。言葉の問題というよりも、言葉を使

う人間の、(大きく言えば、思想の) 問題である。英米では、creative と言えば、大変な褒め言葉であり、尊敬や憧れの響きの言葉である。一方わが国では、芸術家の類は別だが、それ以外の人間の場合は、へたに「独創的」であったりすれば(社会的に)生きにくくなるのが普通である。

私が言いたいのは、(大分弁から共通語に戻して話をすれば、)日本人の大多数が大好きな言葉である「真面目」にしても、突き詰めて言えば、「独創的」とは“馴染まない”ものであろう。その理由は、きわめて簡単に説明できる。つまり、「独創的」であろうとすれば、「人」(すなわち、自分以外の大多数の人間)がしないことを、しなければならなくなるからである。

結論的に言えば、英米人に英語で「creativeである」と、評価され、尊敬され、賞賛されても、日本人である私が、字義的には一見相当するところの、「独創的」を実践する事は、それはそれは大変なことであったということだけは、書き残しておかなければならない。最後は成功したから良かったものの、そうでなかったら、出る杭は打たれていただろう。「信なくば立たず。」と言うが、その「信」があっても、「立たせる」のは簡単なことではないということである。

## 【まとめ】

今となれば、「よくもまあここまでやってこれたものだ!」と言うのが、正直な実感である。全ては、皆様のお陰であり、神仏の御加護に尽きる。

サブタイトルではないが、国際教育の「開拓と実践」のために、私は米国と英国だけでも実に22回も行ったことになる。(含む:1986~87年の客員教授〈テキサス〉)その大半は、背後に、たっぷり「平和ボケ」した日本人である我が別府大学生を引き連れての海外研修であった。

唯ひとつだけ自慢できることがある。それは、一人もケガ人を出さなかったという事実である。勿論、運にも恵まれたのであろうが、努力も人の2倍どころか、10倍はした。テキサスでピストルで殺されそうになってからは、その道のプロについて「危機管理」を学んだりもした。全ては、第1に、「知るべきことを、知っているか。」第2に、「知っていることを、実行・実践できるか。」に尽きる。

No.1 Do you know it?

No.2 Can you do it? (皆さんも、参考にしてください。)

【参考】写真を5枚掲載します。Enjoy them all!

(2012年3月)

## 2003年度入学英文学科1年生と（少数欠席）（2003年4月下旬）



（前列が英文学科教授陣： 向かって右より、吉家講師、グリフィス教授、ブレナン教授、上田学科長、河野助教授、山野助教授）

背景の桜よろしく、「英国1年間留学」が花開き、入学者数が再び増加し始めた頃。

この写真に撮影の学生のうち10数名は、1年半後にはイギリスの大学で念願の留学生生活をエンジョイしていたことになる。この時期からの数年間、私の本学での38年間のなかで最高のgolden yearsであった。



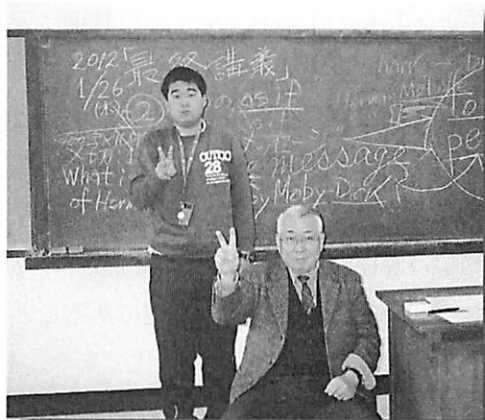
(41番教室にて) 赴任間もない頃。  
27歳頃。  
「言葉は手段、言葉は音声、言葉は訓練」この「3原則」から、上田流は始まった。  
「読み」のテストは「カセットテープ提出」。



(研究室にて) まだタイプライターの時代。  
タイプライターが苦手な私は、これが「必修科目」の本学英文学科生を羨ましく思ったものだ。



(ハワイ・パールハーバーの記念館 [アリゾナ号] 上にて) 合計7回も引率して、その都度ここを訪れた。  
40歳頃。



(36番教室にて) 最後の最後の授業の学生。  
舞君 (3年生)。よく頑張った。